

福音記者の足跡

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

聞き届けてくださる神

マルコによる福音書七・二四―三七

沖村裕史

一人の女が、イエス様のことを「聞いて」やってきました。「彼女の娘は汚れた霊」、「悪霊」に取りつかれていました。彼女はやって「来る」と、イエス様の「足の前に」「ひれ伏」します。それは、五章に描かれていた会堂長ヤイロの姿と重なる、とても印象的な姿です。「女はギリシア人であり、シリア・フェニキアの生まれであったが」と続きます。「が」という言葉は、彼女の登場がイエス様に似つかわしいものではなかったことを仄めかしています。彼女はギリシア人、しかもシリア・フェニキアの生まれです。正真正銘の異邦人です。その女が「娘から悪霊を追い出す」ことを願います。

実に意外なことに、イエス様はこのとき、この願いを拒絶されます。「子供たちのパンを取って、子犬にやっつてはいけません。」この「犬」は、屋内で飼われる小型犬のことですが、ユダヤ人にとって犬は、「最も厚くましく、また最も軽んじられる、悲惨な被造物」であり、その犬と比較されることは耐え難い侮辱でした。ユダヤ教のラビたちが、聖書と「昔の人の言い伝え」に無知な者や、異邦人の生活の仕方を「犬」にたとえていたと伝承されています。

一体、これはどういうことなのでしょう

か。直前の七章一節以下で、異邦人を祭儀的な浄・不浄によって差別することを根本的に否定されたイエス様であったはずですが。そのイエス様がここで、ユダヤ人と非ユダヤ人である異邦人との間を、このように差別的に比較されていることを、どのように理解すればよいのでしょうか。ただひとつ考えられる理由は、神によるイスラエルの選びという救済史的信仰のゆえです。ユダヤ人の中には、唯一イスラエルが神から選ばれた特別な「民」であり、それ以外の世界の「諸国民」は、神の選びから、神の救いから外れた者たちであるという考え方がありました。これは、旧約聖書とそこに描かれる神の救いの歴史が真実である限り、その有効性は失われません。イエス様は確かに、浄・不浄から非ユダヤ人を「異邦人」として差別する考え方は根底から否定されましたが、この神のイスラエルの選びという信仰を神の真実に関わるものとして否定されませんでした。

しかし、拒絶された彼女の口から洩れた一言が、事態を一変させます。「主よ、テブル(食卓)の下の犬たちさえ、幼な子たちのパンくずから食べています。」新共同訳は「主よ、しかし」と問い返す言葉として応答させていますが、「しかし」という言葉は原文にありません。ただ「主よ」です。すがるようなこの一言が、イエス様を動かします。その一言に答えるイエス様のみ言葉を、「それほど言うなら」と新共同訳は訳しますが、口語訳では「その言葉で、十分

である」でした。この訳の方が原文に忠実です。「あなたが語った、その言葉だけの理由で、その言葉のゆえに、既に救いが、癒しが起こっている」と言われたのです。イエス様はこれまで、癒しをなさる時には直接お声をかけられました。会堂長ヤイロの娘がもう死んでしまった時、その娘に向かって「娘よ、起きなさい」と言われました。イエス様が言葉をかけてくださった、その言葉が力を持ったかのように癒しが起こったと福音書は記します。しかしここで、イエス様は子どもが治るようにと癒しを告げるとか、遠くの方から子どもに声をかけるように呼びかけられるといったことをなさいません。まるで、彼女が語ったその言葉がイエス様のみ言葉と同じ力を持ったかのようにです。あなたがそう言ったその時、「娘はもう治った」とイエス様は宣言されているのです。

一旦は拒絶されたこの女は、それでもなお、イエス様に食いがついています。しかし、傲慢さからそうしたわけではありません。へりくだっています。ひざまずき、ひれ伏したままにそのお顔を見上げながら、彼女は、「主よ、そう呼びかけました。

一旦は断られたのに、それでもあえて言うひとこと、それは「そこをなんとか」です。「もう診療の受付時間は終わりました。」「そこをなんとか。この子の熱が下がらないんです。」あるいは、「もうこれ以上は貸せないよ。前の分だつて返してもらっていないのに。」「そこをなんとか。来月には必ずなんとかしますから。」断る側の理由や事情を理解していかないというではありません。断られて当然であることを重々承知の上で、しかしあえてお願いしているのであつて、言ってしまうは甘えているのです。甘えるなど言われればそれまでですが、だれの人

生にも他人に甘えるしかないという場面が必ずあるはずですが。甘えるということは、相手をどこかで無条件に信頼してこそ、成立する感情です。小さい子どもがお菓子を買ってもらいたくて駄々をこねるときなども、「駄目」と言う母親に「そこをなんとか」と言っているわけですが、その結果はともあれ、母親を全面的に信頼して駄々をこねていること自体に、重要な意味があると言えるのではないのでしょうか。大事なことはそのお菓子ではなく、そんなやり取りを繰り返すことで、親子が親子になり、子どもが愛を知ることです。

つらい病気を抱えて、思わず天を仰いで祈るときなど、まさにそんな機会です。人が、自分ひとり存在しているのではなく、何か大きな存在に生かされていて、その存在に甘えるしかないのでと知る機会。信頼して甘えることで、相手の心とつながる瞬間こそが、人間の理屈を超えた何かが通じる尊い瞬間です。天と地がつながる瞬間でもあります。友人に「無理」と言われ、銀行に「残念ながら」と言われ、医者「駄目」と言われ、この地上のすべてにおいて「ノー」と言われても、恐れずに天に向かって駄々をこね、無条件なる信頼を込めて言ってみる、「ですが、そこをなんとか」と。たとえ、その頼みを聞いてもらえなかったとしても、その必死な思いは必ず通じているし、後になって、実はより大きな意味で、しっかりと願いは聞き入れられていたと知ることがあるはずですが。

今朝のみ言葉は、そのような祈りを持って、ひざまずいていないと聞こえない言葉です。ひざまずいていないと見えてこない主の恵みでした。

(二〇一四年二月一四日、待降節第三主日礼拝)